



KITANO NOUGYOUBITO
北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みを紹介します。

●共助の絆が農業を支える。

**地域の農家が互いに支え合う
組合形式で農業に臨む。
「防除も除雪も共同で。
みんなで助け合うのが自然なこと」**

【知内町】
寺尾正弘さん(水稻ニラ栽培)



**無人ヘリによる
防除組合を組織**

道南の知内町は、「ふくらひらんこ」をはじめとする水稻栽培とニラやホウレンソウといった葉物野菜の栽培が盛んな地域です。「知内町無人ヘリコプター防除組合」の組合長を務める寺尾正弘さんは平成7年(1995年)から無人ヘリコプターによる水稻の防除に取り組んできました。「散布用ホースを引張りながらの防除作業は重労働でした。隣町の木古内町で無人ヘリコプターが導入されたことを知り、自分たちもやってみよう」と考えました

寺尾さんは若手農業後継者たちに声をかけ、最初は4名でオペレーター資格を取得。8戸分約70ヘクタールの水田の共同防除を請け負うことからスタートしました。防除作業が飛躍的に楽になったこと、また国助成を受けたことなどから、2年目にはオペレーター数が18名に増大。防除を請け負う水田も300ヘクタールに増え、「R-50」を4機導入して作業にあたりました。

「特に専業農家からの関心が高く、少しでも防除作業が楽になるなら」という思いがあつたようです」と寺尾さんは当時を振り返ります。現在のオペレーター数は23名、組合員数は80戸に増え、知内町内の水田の約7割をカバーするまでになりました。

**管理体制を強化して
ポジティイブリスト対策も**

寺尾さんは若手農業後継者たちに声をかけ、最初は4名でオペレーター資格を取得。8戸分約70ヘクタールの水田の共同防除を請け負うことからスタートしました。防除作業が飛躍的に楽になったこと、また国助成を受けたことなどから、2年目にはオペレーター数が18名に増大。防除を請け負う水田も300ヘクタールに増え、「R-50」を4機導入して作業にあたりました。

「特に専業農家からの関心が高く、少しでも防除作業が楽になるなら」という思いがあつたようです」と寺尾さんは当時を振り返ります。現在のオペレーター数は23名、組合員数は80戸に増え、知内町内の水田の約7割をカバーするまでになりました。

トルハウスへの飛散防止や、散布量の管理などを徹底するため。ポジティイブリスト制度への対策としても、手を抜くことはできない」と寺尾さんは語ります。「薬剤の散布にはかなり神経をつかうようになりました。飛散しにくい粒剤による防除にも取り組んでいます。散布量やタイムスケジュールもすべて記録しています」

この取り組みは、寺尾さんの呼びかけで始まりました。「こういつ時代だからこそ必要な努力。今は何も問題が起きていないとも、自分たちにはハウス農家の説明責任がある」と寺尾さんは強調します。オペレーターの負担は増えますが、メンバーの

●おじゅました3月初旬はニラ出荷がピークを迎える時期。作業の合間をぬって、取材にご協力いただきました。



●葉の幅が広く、甘みがあると評判のニラ「北の華」は、今や全国ブランドへと成長しました。

**昔から続く助け合いの心
共同だからできること**

寺尾さんは、大型除雪機を共同で所有・管理する「知内町除雪機利用組合」の組合長も兼任しています。知内町の名前を全国に広めた特産のニラ栽培は、冬期に出荷の最盛期を迎えます。ビニールハウスの周囲の除雪が欠かせませんが、個人で除雪機を所有するとなると、メンテナンスや故障時の対応など、管理には手間がかかります。これを解決するために組合をつくり、50台の除雪機を括管理。80戸ほどの農家が利用料を支払い、借り受けるという形式にしました。こうした助け合いの精神は昔からあつた、と寺尾さんは言います。「昭和40年代半ばに二郎の組合が発足した頃から、二郎ハウスのビニールかけは共同で行っています。みんなで助け合っていく」という気持ちは昔から変わっていません。そういう土地柄だから、無人ヘリコプターの導入に対しても理解がスムーズだったのでしよう」

伝統的な地域の絆を大切にしながら、新しい農業の可能性も模索する。地域への愛情と農業への搖るぎない信念を持つ、寺尾さんのやさしい笑顔が心に残りました。



●除雪機も組合で共同管理しています。「利用料を支払っても代替機がすぐに用意できるので安心です」



●水稻とニラの栽培を手がける寺尾正弘さん。「農業を取り巻く環境は、ここ数年で大きく変わってきています。ポジティイブリスト制度への対応など、勉強会を開いて新しい情報を得ています」